

キノコの廃菌床 燃料に活用

シン・バイオマス松阪発電所



廃菌床の説明をする西川社長。いずれも松阪市木の郷町で

松阪市の発電会社「パワーエイド三重」が同市木の郷町の木材コンビナート「ウッドピア松阪」内に建設している発電所「シン・バイオマス松阪発電所」は、昨年12月から試運転を始めた。キノコの生産過程で発生する廃菌床を使っていて、3月には本格運転を始める。西川弘純社長（35）は「活用されていないものを利用し、電気の地産地消を担っていきたい」と力を込める。（芦原 遼）

3月に本格運転 ホクトが電気購入



3月から本格運転を開始するシン・バイオマス松阪発電所

パワーエイド三重は、2021年にキノコ生産大手の「ホクト」（長野市）が多気町西山に生産工場「三重きのこセンター」を稼働したこと、同年に「バイオマスパワーテクノロジーズ」（松阪市小片野町）など6社による合同会社として設立された。

工場ではマイタケとブナシメジを年間6千トンを生産しており、培地として使う菌床が1日50〜60トンを排出される。全国にある他の工場では、農家の肥料や家畜の飼料などとして安価で販売しているが、同工場では近隣で活用してくれる農家などがなかったことから、バイオマス燃料として使用することになった。

パワーエイドでは廃菌床を買い取り、木材チップを3〜4割混ぜてバイオマス燃料を製造。廃菌床は水分を含んでいるため、可燃性の高い固形燃料「RPF」と合わせて、1時間当たり1990キロ、1年間で164万7200キロ（約4千世帯分）を発電する。

発電した電気は、全てホクトが購入して利用すること、電気の地産地消のサイクルを生むことができる。ホクトによると、パワーエイド三重の発電分と工場に設置している太陽光発電で、工場内のほぼ全ての電力を賄うことができる。同社の担当者は「工場では多くの電力を使っているが、バイオマス発電とすることで二酸化炭素（CO₂）の削減に少しでも貢献できた」と話した。